



# 名大トピックス

No.129 平成16年2月27日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016  
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

## AC21全学シンポジウムが開催される




国際学術コンソーシアム(AC21)推進室は、1月8日(木)、大学院国際開発研究科多目的オーデトリウムにおいて、AC21全学シンポジウム「名古屋大学の国際化 - AC21をいかに活用するか?」を開催しました。

このシンポジウムは、本学が真に世界水準の大学として認められるためには、いかなる周辺条件を整える

必要があるのか、また、AC21をどのように利用していくべきかについて、その期待と本学の国際機能の足元からの改善の両面から議論するために開催されたもので、当日は、本学の教職員及び大学院学生など約130名の参加があり、会場の多目的オーデトリウムは満員となりました。

### CONTENTS

- |   |  |
|---|--|
| ・ AC21 全学シンポジウムが開催される..... 1  | ・ 年代測定総合研究センターが体験学習を開催する..... 9            |
| ・ 全学同窓会と産学官連携推進本部が講演会を共催する..... 3   | ・ 農学国際教育協力研究センターが第5回オープンフォーラムを開催する..... 10 |
|  ・ 有機デバイス関連界面の解明と制御<br>関 一彦..... 4 | ・ 職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研修会が開催される..... 10   |
| ・ 大学入試センター試験が実施される..... 6   | ・ 財務会計システムの全体概要説明会が開催される..... 11           |
| ・ 名古屋大学情報系 COE が第2回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウムを開催..... 7   | [ INFORMATION ]                            |
| ・ 博物館で国立大学博物館等協議会が開催される..... 8  | ・ イベント等の開催予定一覧..... 12                     |
|   | ・ 本学関係の新聞記事掲載一覧(16年1月分)..... 13            |

シンポジウムは、松尾総長による「AC21はなぜ創られたか？」と題した開会のあいさつで始まり、続いて、林 AC21推進室長（総長補佐）が「What is AC21？ - AC21の理念、組織、活動」をテーマに、また、梶田将司情報連携基盤センター助教授が「e-learning hub およびオンライン言語教育プログラム」をテーマに、AC21プロジェクトについて紹介しました。次に、池田評価情報分析室長（総長補佐）による「国際標準の教育品質保証（Quality Assurance）とベンチマーキング」及び野水 勉留学生センター教授による「名古屋大学の受け入れと教育：現状と問題点等」と題したプレゼンテーションがあり、本学がメンバー大学の優れた点を目標とするベンチマーキングを進めることの有用性、他方で、AC21の活動を進めることにより、学生を受け入れるための講義の品質、成績評価システム及び派遣のための学生の語学力などの大きな問題が明らかになり、早急に改善する必要のあることが報告されました。

その後、奥野副総長のコーディネートによるパネルディスカッションが「AC21への期待」をテーマに行われ、松尾総長、佐々木副総長、平野工学研究科長及び末松留学生センター長の4名のパネリストが、本学の



AC21プロジェクトを紹介する林 AC21推進室長

国際化の問題点と解決の方向性及び AC21に何を期待するかについて議論しました。議論及びフロアとの質疑応答では、本学の主導で、全世界的な組織が一つの理念の下に動き出したことの価値、国際的活動への全学同窓会等からの支援、国際交流協力機構への展開、次期総長も AC21を本学の世界拠点形成の要として位置付けていくことなどが話題となりました。最後に、伊藤副総長による閉会のあいさつがあり、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。

AC21は、今後、本学が世界の学術研究の拠点として発展していくための重要な基盤として大いに期待されており、このシンポジウムの開催を契機として、AC21の学内における PR 活動を進めていく予定です。



開会のあいさつをする松尾総長



## 全学同窓会と産学官連携推進本部が講演会を共催する 「世界に羽ばたけ！わが母校 - 研究開発 (R & D) と日本経済再生の経営課題 - 」

全学同窓会と産学官連携推進本部は、1月15日(木)環境総合館レクチャーホールにおいて、本学卒業生の依田直也氏を講師に迎え、「世界に羽ばたけ！わが母校 - 研究開発 (R & D) と日本経済再生の経営課題 - 」と題する講演会を開催しました。

全学同窓会は、平成14年10月に設立されて以来、大学と社会を結ぶ必須の組織を目指して活動しており、今回の講演会も産学連携を視野に入れて、産学官連携推進本部との共催により初めて開催したもので、当日は、太田全学同窓会副会長(株式会社デンソー特別顧問・豊田紡織株式会社相談役)をはじめ、本学の卒業生、教職員及び学生等60名を超える参加がありました。

講師の依田氏は、昭和29年に本学の工学部を卒業し、東レ株式会社中央研究所に入社、その後、株式会社東レ経営研究所代表取締役社長を務められ、現在は、立正大学大学院経営学研究科教授として活躍されています。

講演会は、「メイド・イン・ジャパンからメイド・バイ・ジャパンへ」をキーワードに、大学の研究成果をいかにベンチャー・ビジネスに結びつけるかについて、米国やアジアの事例などを紹介しながら話が進み、依田氏は、日本経済再生には「大学の研究が原動力」になり、大学には「国際性豊かな優れた人材の育成」を期待したいと語られました。また、講演終了後には、活発な質疑応答が行われました。

最後に、後藤産学官連携推進本部長(副総長)から「大学に対して貴重な御意見をいただいた。今後も外部の声を聞かせていただき、本学の発展に役立てていきたい。」とあいさつがありました。

参加した卒業生の方からは、東山キャンパスの様変わりに感心されるとともに、母校に来るきっかけとなったことを喜ぶ声も聞かれました。



講演する依田氏



熱心に聴講する参加者



## 有機デバイス関連界面の解明と制御

関 一 彦

私たちの研究主題は、最近急速に発展してきた「有機エレクトロニクス」の分野で、主役となる有機物質がほかの物質と接する境界(界面)でどんなことが起こるかを、いろいろな研究手法で調べることです。

さまざまな電化製品やコンピューターなどを通じて、エレクトロニクスはわれわれの生活に不可欠なものとなっています。その心臓部で用いられてきたのは、シリコンなどの無機物質の半導体(無機半導体)です。しかし、最近になって、炭素を骨格とする有機物質を用いた有機エレクトロニクスが急速に発展しています。軽い元素である炭素を主成分とする有機物質は、軽量で柔軟なので、はば広い使い方のできる、新しい電子デバイスが考えられています。また、構成単位となる有機分子は、かなり意のままに合成でき、物質のもつ特性を細かく調節できるという利点もあります。

有機物質の大半は電気を流さない絶縁体で、たとえば電線の被覆にビニールを使うのはこれを利用しています。電気を流す有機物質の本格的な研究は、日本の赤松秀雄、井口洋夫(いのくちひろお)両博士などにより、世界の数ヶ所で約50年前に始まりました。最初の実用化はコピー機の感光体で、今ではほとんど有機物質が用いられています。最近では、有機物質でつくった薄膜を電極で挟んで電圧をかけることで発光させる「有機EL素子」(図1)が商品化され、液晶表示素子やプラズマディスプレイと競う次世代の表示素子として期待を集めています。さらに有機物質を使った太陽電池やトランジスターの開発も急速に進展しています。

このような素子では、有機薄膜に接する電極との接触面(界面)を通して電子が入りしすし、いくつかの有機薄膜を組み合わせるときの、その間の界面も通らねばなりません。意のままに電子の通り方を制御することは、優

れた機能をもつ素子を作る基本となります。また、電子デバイスには、界面付近でだけ起こる現象を使うものも多く、このような現象を調べ、制御することも大切です。このような界面での原子の並び方や電子の振る舞いは、シリコンなどの無機物質では長年調べられ、膨大な知識が蓄積されて、現在のエレクトロニクスを支えています。しかし有機物質は無機物質とさまざまな点で異なり、無機物質で築かれた知識をそのまま使うわけにはいきません。われわれの研究は、有機物質についての新しい知の体系を作ることをめざしています。電子的な機能をもたせるには、ある程度大きな分子が必要ですが、大きな分子が界面にどう配列し、そこで電子がどう振舞うか、さらに電極となる金属と反応したりするのか、といったことは、表面科学や分子科学の分野でも新局面をひらく研究主題です。

私たちは、約10年前に世界にさきがけてこの分野の系統的な研究を開始しましたが、幸い多くの注目を集め、世界中にたくさんの仲間ができています。材料関連の最大規模の学会である米国材料学会(MRS)でも、昨年秋から有機界面の独立セッションが設けられました。

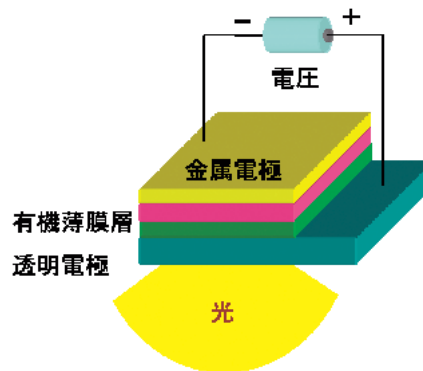


図1 有機EL素子。透明電極の上に有機薄膜層を積み重ね、最後に金属電極を乗せて作ります。電極間に電圧をかけると光が発生します。

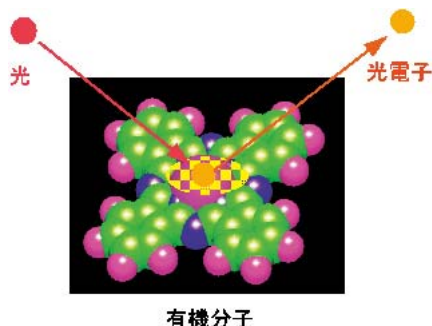


図2 光電子分光。有機分子に光を照射して分子の中の電子をたたき出し、出てきた光電子の速さを測ることで、分子中での電子のようすを調べます。

現在科研費の補助をうけ、名古屋大学高等研究院で行っているプロジェクトでは、有機物質の薄膜に、光や電子を照射して応答を調べるなど、さまざまな表面科学の手法をもちいて、界面での原子・分子の並び方やそこでの電子の振る舞いを調べています。図2に、代表的な手法として、試料に光を照射して電子をたたき出す光電子分光を示しました。他にも、赤外分光、低速電子線回折、ケルビン法や、シンクロトロン放射光を用いた軟X線吸収分光、レーザー光を用いた二次高調波発生などの手法を用いています。

これらの研究から、たとえば、有機薄膜と金属電極が接している界面では、図3に示すような、プラスとマイナスの電荷のシートが向かい合った層(電気二重層)ができることがわかりました。この層は、界面を横切る電子の動きに大きな影響を与えます。このような層のでき方を、いろいろな有機物質と金属の組み合わせについて調べています。

この分野には多くの電気系、化学系企業も参加しています。これらの企業では、われわれが調べているような基礎

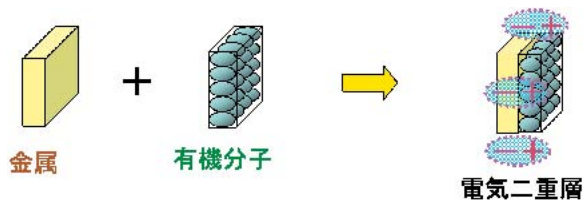


図3 有機物質と金属電極が接したときにできるプラス・マイナスの電荷シート(電気二重層)。

的知識を得たいにもかかわらず、商品開発に追われ、自らは手を出しにくいのが現状です。また設備面でも、本格的な研究を行うには、かなりの設備を整える必要があります。幸いわれわれはある程度の設備を揃えることができているので、きちんとした実験結果を蓄積し、確実な基礎情報をこれら応用研究者に提供することも、大切な役目と考えています。このような見地から、平成15年1月には企業研究者にも呼びかけた公開シンポジウムを開催し、多くの参加者を得ることができました。

このように、われわれの研究は、材料科学、固体物理、表面科学、電子工学といった、幅広い分野にまたがる境界領域に、基礎科学としても、応用の基礎としても大切な新しい学問分野を切り開こうとするものです。高等研究院での交流をはじめ、いろいろな機会での研究の視野を広げ、国内外との交流や情報発信をさらに活発にしたいと考えています。このような研究に興味をもたれる方の訪問を歓迎します。

### プロフィール

せき かずひこ



1947年生まれ。1975年東京大学大学院理学系研究科化学専攻修了(理学博士)、日本学術振興会博士研究員を経て、1978年分子科学研究所助手。1986年広島大学理学部助教授。1991年名古屋大学理学部化学科教授。1998年4月より物質科学国際研究センター教授。2003年より高等研究院流動教官を兼任。専門は機能性有機固体・薄膜とその表面・界面の研究。Organic Electronics誌(エルセビア社)編集者。著書に「物理化学」(岩波書店)、Chemical Applications of Synchrotron Radiation(World Scientific)など。意欲ある大学院生募集中。seki@mat.chem.nagoya-u.ac.jp, 研究室 HP <http://mat.chem.nagoya-u.ac.jp>



## 大学入試センター試験が実施される - 本学関係会場で6,700名が受験 -

平成16年度大学入学者選抜大学入試センター試験が、1月17日（土）、18日（日）の二日間、全国712会場で実施され、本学関係では、東山キャンパスや学外の高校など8会場で約6,760名が受験し、全国で約53万6千人が受験しました。

試験当日は、朝早くからコートやマフラーで厚着した受験生が、豊田講堂やグリーンベルト等に集まり、引率の教師等から激励を受けたり、受験にあたっての



緊張した面持ちで会場に入る受験生

注意事項を聞いていました。また、一様に緊張した面持ちで、試験直前まで、参考書やノートを広げ、最終チェックをする受験生の姿があちこちで見られました。試験後には、ほっとした表情を浮かべながら、受験生同士で問題の答え合わせをしていました。

今年は雪による交通機関の乱れが原因で、試験開始時間を遅らせた会場もありましたが、幸い、本学関係の試験場では初日に雪が降ったものの、順調に行われ、初日の外国語から、2日目の最終科目の公民まで予定どおり行われました。



家路に向かう受験生

また、松尾総長と渡橋事務局長が、学外の各試験場（高等学校）を訪れ、高等学校関係者への謝辞及び本学関係者の試験場主任、教職員にねぎらいの言葉をかけました。

なお、本学の個別学力検査は、分離分割方式により、前期日程が2月25日（水）、後期日程が3月12日（金）に実施されます。



試験後、ほっとした表情を浮かべる受験生



## 名古屋大学情報系 COE が第 2 回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウムを開催

名古屋大学情報系 COE は、1月8日(木)、9日(金)の両日、シンポジオンホール及び豊田講堂において、第2回社会情報基盤のための音声・映像の知的統合シンポジウムを開催しました。

情報系 COE は、「21世紀 COE プログラム」において平成14年度に採択された拠点プログラム「社会情報基盤のための音声・映像の知的統合」の推進組織で、末永康仁情報科学研究科教授をリーダーに、大学院情報科学研究科、大学院工学研究科、情報メディア教育センター、情報連携基



概要説明する末永教授

盤センター等に所属する情報科学を専門とする教官によって構成され、音声や映像などのメディア情報の統合的な処理に関する世界トップレベルの教育研究を推進しています。

今回は、平成14年度の第1回のシンポジウムに続く2回目の開催であり、「知的メディア処理・統合技術による社会情報基盤への貢献」というテーマのもと、国際シンポジウムとして開催されました。

シンポジウムは、佐々木副総長による開会宣言、松尾総長、平野工学研究科長及び神谷情報科学研究科長によるあいさつ、末永教授からの本プログラムの概要説明に始まり、3件の招待講演を含む11件の講演が行われました。学内外から289名もの参加者があり、特に、Dr. John Hansen (Professor, Colorado University)、Dr. David J. Hawkes (Professor, Guy's Hospital, King's College of London) 及び Dr. Alex Pentland (Professor, MIT Media Laboratory) による3件の招待講演は、世界的に著名な研



会場の様子(シンポジオンホール)

究者による講演ということもあり、シンポジオンホールが満員になるほどの盛況ぶりでした。

豊田講堂では、拠点構成メンバーによる13件のポスター・デモンストレーション発表が行われ、隣接する展示会場には、本プログラムの中心的プロジェクトである「運転支援情報統合システム」及び「車内音声対話実験車」が展示されました。各ブースでは議論や意見交換が活発に行われるなど参加者の大きな関心を集め、拠点プログラムの今後の一層の進展に大きな期待を抱かせるものとなりました。

なお、シンポジウムの概要は、情報系 COE の Web ページ <http://www.imi.coe.nagoya-u.ac.jp/> に掲載されています。また、シンポジウムの内容は、英文の論文集としてまとめられています。



音声対話収集車



## 博物館で国立大学博物館等協議会が開催される

第6回国立大学博物館等協議会が、1月30日（金）本学を当番校として、博物館で開催されました。

この協議会は、相互の緊密な連絡と協力により、国立大学における学術標本の収集・保存、活用の向上を図り、もって教育・研究の進展に寄与することを目的として開催されているもので、当日は、同協議会に登録されている31機関のうち、27機関から56名の参加がありました。

協議会では、主催校として、足立博物館長が開会のあいさつをした後、同協議会副会長の山中京都大学博物館長（高橋東京大学博物館長の代理）が協議会を代表して、この全国組織の意義と今後の活動方針に関するあいさつをしました。続いて、参加者の自己紹介及び参加機関の活動の現況と問題点が、北から順に述べられ、多くの大学から、国立大学法人化後の予算配分や運営体制について意見が出されました。また、本学

博物館の活動報告が、過去4年間に名大トピックスに掲載された博物館関連記事を抜粋したダイジェスト版を使って行われ、その幅広い活動が高く評価されました。

議事に入り、大学博物館の社会貢献や地域貢献について、様々な事例が報告されました。また、特別展の共同開催等の大学博物館間の連携についても、活発な意見交換が行われ有意義なものとなりました。最後に、次回の協議会を平成16年の夏に東京農工大学で開催することが正式に決まりました。

協議会終了後、博物館で開催されている第3回企画展「名古屋大学野外観察園の植物たち」と常設展の見学会が行われ、展示を見ながら様々な議論が展開されました。その後、会場をシンポジオンホールに移して、懇親会が開催され、参加者は、和やかな雰囲気の中、閉会まで歓談を楽しんでいました。



協議会の様子





## 年代測定総合研究センターが体験学習を開催する - 古代人のテクノロジー2003 -

年代測定総合研究センターは、12月20日（土）、21日（日）の2日間、体験学習「古代人のテクノロジー2003」を開催しました。この体験学習は、岩石や鉱物の特徴を最大限に利用してきた古代人の叡知や技術に触れることで、小中学生のユニークな発想や夢を育てることを目的に行われたもので、当日は、学校配布の募集ポスターや新聞記事を通じて応募のあった愛知、岐阜、三重県の小中学生43名と保護者7名の参加がありました。

初日は、雪のため交通機関のダイヤが乱れましたが、定刻のわずか10分遅れで全員が集合しました。最初に、参加者は、炭素14年代測定法の講義を聴いて縄文時代の年代を理解し、また、当時の石を使った道具や装飾品についても学習しました。次に、岩石の硬さを調べ、鉄より固い岩石に昔の人はどのようにして穴をあけたのかについて考えました。この答えとして、骨や竹で石に穴をあけたとの説明がありましたが、参加者は半

信半疑の様子でした。午後からは、本当に竹で石に穴があくかどうかを確かめるために、石の窪みに研磨剤を置いて、ハンドドリルに取り付けた竹箸を回してみることになりました。休憩をとりながら、ひたすら回すこと約40分、最初の「あいた」という声があり、その後、次々と歓喜の声があがりました。

2日目は、岩石の出来方の講義を聴いてから、石包丁の製作に挑戦しました。平たい岩石を斜めに削ることが難しかったようですが、時間をかけて個性のある石包丁を作り上げました。参加者は、苦勞して自分で作った石包丁でリンゴの皮がむけた時には、とても感激していました。最後に、全員に参加証が手渡され、自分の作品とともに、大切に持ち帰りました。また、参加した中高生や保護者から、このような機会があれば是非また参加したいとの礼状や年賀状が同センターに多く届きました。



竹で石に細い穴をあける参加者



石包丁を作製する参加者



自作の石包丁でリンゴの皮をむく参加者



## 農学国際教育協力研究センターが 第5回オープンフォーラムを開催する

農学国際教育協力研究センターは、12月18(木)、19日(金)の2日間、「インドシナ半島における農業・高等教育」をテーマに第5回オープンフォーラムを豊田講堂第1会議室において開催しました。

今回のフォーラムは、ベトナム戦争やポルポトによるジェノサイドとその後の戦乱のため、他のアジア諸国から遅れた状況にあるベトナム、カンボジア及びラオスに焦点を当て、インドシナ半島の農業・高等教育における国際協力を的確かつ効率よく行うための方策について、この地域で活動している日本の大学と国際協力機関とが討議することにより見つけることを目的として行われたもので、当日は、全国から約70名の参加がありました。

初日は、金森秀行国際協力機構(JICA)国際協力専門員・元同センター客員教授による「JICA 農業・高等教育プロジェクトの評価と教訓」と題する講演のほか、日本の大学の研究者及び国際協力機関の職員による現地での取り組み等の報告がありました。

2日目は、前日の講演及び松本哲男同センター教授によるこの地域における取り組みの報告と提案に基づいて、活発な討議が行われました。国立大学は今年の4月から国立大学法人となり、従来に比べ、自ら研究資金を獲得することに力を注ぐ必要性が飛躍的に高まるとともに、今後の国際協力に関するカウンターパートの多様な要求に、一つの大学で対応することはますます困難になることが予想され、今後お互いに協力してインドシナ地域の農業・高等教育に取り組むことが確認、合意されました。



## 職員のためのセクシュアル・ハラスメント 防止研修会が開催される

職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止研修会が11月19日(水)、12月9日(火)及び1月21日(水)に、主任以下の職員を対象に、また、12月19日(金)に、掛長以上の職員を対象に実施されました。

この研修会は、セクシュアル・ハラスメントは人権侵害であるということの理解、セクシュアル・ハラスメントの早期発見、セクシュアル・ハラスメント相談所の周知を目的として、本年度より開催されたもので、350名の職員が参加しました。

12月19日の研修会では、職場のセクハラを考えるネットワーク事務局長の金子雅臣氏から「セクハラなぜ起きる、どう対処する」と題し、セクシュアル・ハラスメントの最近の動向及び理解などについて講演がありました。講演終了後には、金子人事課長から職場内でセクシュアル・ハラスメントが発生した場合の管理職としての対処等の説明、また、セクシュアル・ハラスメント相談所の白石相談員から相談所の紹介等があり、参加者は熱心に聴講していました。



講演する金子氏



## 財務会計システムの全体概要説明会が開催される

財務会計システムの全体概要説明会が、1月26日（月）、27日（火）事務局第1会議室において、会計事務を担当する部課長、事務長及び掛長等を対象に開催されました。

この説明会は、間近に迫った国立大学法人化後の財務会計処理の全体概要と具体的な操作方法を説明して関係者の理解を得ることを目的に開催されたもので、2日間で約200名が参加し、27日には監査法人の参加もありました。また、関係者が業務多忙な時期の開催となったため、各自が都合の良い日を選択して参加できるようにとの配慮から、2日間とも同じ内容で実施されました。

説明会では、経理部情報処理課の担当者等から、法人化後の財務会計処理の一連の流れに沿って、午前中に、「利用者権限」における利用者情報登録やマスター設定、「予算処理」における予算金額登録や予算配分

通知書作成、「収入処理」における収入契約決議書入力や入金実績入力について、午後からは、「支出処理」における支出契約決議入力や入金入力、「資産管理」における資産登録や原価償却費会計連携及び「決算処理」における月次処理や年次締処理の方法等について説明がありました。参加者は、現行の官会計から新たに移行する企業会計に伴う未経験な仕訳処理、貸借対照表及び損益計算書の作成等について熱心に聴講していました。説明後には、財務会計システムの機能や操作方法のほか、法人化後の国立大学会計基準等についての疑問点の確認や活発な質疑応答が行われ、参加者の関心の高さを伺わせました。

今後は、実務担当者を対象としたパソコンの実操作研修を2月23日（月）から約10日間実施し、4月からの法人化に備えることにしています。



熱心に説明を聞く参加者

 INFORMATION 

## イベント等の開催予定一覧

イベント	日時	概要	連絡先
エコトピア科学研究機構プレシンポジウム	3月3日(水)13時～、 3月4日(木)9時30分～17時	会場：シンポジオンホール	工学部・大学院工学研究科総務課 052 - 789 - 3404
大学院文学研究科公開シンポジウム(地下鉄開通記念イベント)	3月13日(土)10時30分～16時	テーマ：今、開かれる文庫の魅力 会場：文学部237講義室	文学部・大学院文学研究科庶務掛 052 - 789 - 2202
国際シンポジウム「プレート沈み込み帯におけるスロースリップ」	3月16日(火)13時30分～3月18日(木)15時	概要：プレート沈み込み域で最近検出されているスロースリップイベントについて環太平洋の10カ国の研究者と議論を交える。 <a href="http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/kimata/2004mar/">http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/kimata/2004mar/</a>	大学院環境学研究科 附属地震火山・防災研究センター・木股文昭研究室 052 - 789 - 3040
第7回博物館特別展	3月17日(水)～7月30日(金)10時～16時	テーマ：名古屋大学研究・教育を支えた匠の技 会場：博物館 休館日：月、火曜日 ただし、祝休日は開館	博物館事務室 052 - 789 - 5767
第7回博物館特別展関連講演会	4月22日(木)15時～	講演者：増田忠志理学部技術部第一装置開発班技術班長 会場：博物館講義室	博物館事務室 052 - 789 - 5767
中学生のためのネイチャーウォッチング	5月8日(土)		博物館事務室 052 - 789 - 5767
第7回博物館特別展関連講演会	5月20日(木)15時～	講演者：鈴木年代測定総合研究センター長 会場：博物館講義室	博物館事務室 052 - 789 - 5767

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年1月分）

	記事	月日	新聞等名
1	ロボットの夢中部新ものづくり：大熊繁・工学研究科教授にロボットの未来を聞く「ひらめき」を持たせたい	1.1(木)	中日(朝刊)
2	ロボット学者が語る温故知新：福田敏男・工学研究科教授 からくり師は天才	1.1(木)	中日(朝刊)
3	ロボフェスタ発起人会代表 大熊繁・工学研究科教授に聞く モノづくりの楽しさ 子どもたちに見てほしい	1.3(土)	読売
4	愛・地球博に登場するロボットについて 福田敏男・工学研究科教授 「ともに快適に暮らす時代へ」	1.3(土)	朝日(朝刊)
5	少人数学級 愛知県が本格検討 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授「予算措置が本筋」	1.6(火)	朝日(朝刊)
6	時評：月尾嘉男・元本学教授 コミュニティー・ビジネス	1.6(火)	電気新聞
7	工学研究科系の6つの研究センターと一施設をすべて統合し、「エコトピア科学研究機構」を来年度から発足させる	1.6(火) 1.21(水) 1.22(木)	読売 他2社
8	学生之新聞：関東・中部・関西 大学生活ここに違い 出席者：4年・宮崎達也など4人	1.6(火)	中日(朝刊)
9	東邦ガスは本学などと共同で、家庭用燃料電池をネットワーク化し 余剰電力を融通するシステムを研究	1.7(水)	中日(朝刊)
10	岩谷直治記念財団 第30回「岩谷科学技術研究助成金」 石原一彰・工学研究科教授ら18名	1.7(水)	日刊工業
11	私としごと：本学就職相談員・船津静代 厳しい時代、むしろ好機	1.7(水)	朝日(夕刊)
12	名古屋大学 COE オープン・レクチャー 講演「インド古典学の意味論」	1.7(水) 1.13(火)	朝日(夕刊) 中日(朝刊)
13	工学研究科教授会は研究科長・部長に澤木宣彦教授を選出 環境学研究科教授会は研究科長に黒田達朗教授を選出	1.8(木) 1.12(月)	中日(朝刊) 他2社
14	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 白髪は老化にあらず	1.8(木)	朝日(朝刊)
15	中野紀和男・生物機能開発利用研究センター教授が豊田市に「若林座」資料を寄贈	1.8(木)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
16	博物館で植物の写真展「野外観察園の植物たち」を開催	1.8(木) 1.16(金)	朝日(朝刊) 日経(夕刊)
17	経済教室：理化学研究所理事長・野依良治・本学特任教授 科学技術国益考え新戦略 競争意識を高めよ 個人の創造力重視が基本	1.9(金)	日経(朝刊)
18	医学の現場から：二村雄次・医学系研究科教授 胆道がん 難手術の肝門部 腹部超音波検査で早期発見を	1.9(金)	中日(朝刊)
19	イラクの子ども救いたい イラク人少年、医学部附属病院に入院	1.9(金) 1.10(土)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
20	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 芸術と科学の吸引力	1.9(金)	朝日(夕刊)
21	環境医学研究所教授会は環境医学研究所長・環境医学研究所附属宇宙医学実験センター長に児玉逸雄教授を選出	1.10(土)	中日(朝刊)
22	大英博物館で「カラクリ」実演と講演 9代目玉屋庄兵衛さんとからくり文化の歴史に詳しい末松良一・工学研究科教授	1.10(土)	中日(夕刊)
23	時のおもり：池内了・理学研究科教授 英雄が輩出するとき 10年先の花の種を仕込む	1.12(月)	中日(朝刊)
24	大学の第三者評価制度 学長ら期待や注文 池田輝政・総長補佐 「経営意識が変わる」	1.12(月)	読売
25	江戸・明治期の医療用具が故・富田忠太郎医師宅から大量に発見 本学や東大の博物館に寄贈された	1.12(月)	毎日(朝刊)
26	法科大学院を開設する大学の間で、教材を共有化 本学が呼び掛け20校連携を目指す	1.12(月)	日経(朝刊)
27	「科学と音楽の夕べ ニッポン夢おこし from 浜松」 野依良治・特任教授による特別講演「憧れと感動、そして志」など	1.13(火)	日経(朝刊)
28	研究室発：祖父江元・医学系研究科教授 神経内科 神経変性疾患を究明	1.13(火)	中日(朝刊)
29	就職活動支援・業界研究会 テーマ「メーカーと金融業界を正しく知ろう」 主催は本学就職活動支援団体 ONN	1.13(火)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
30	With キャンパス：「名古屋大学下宿用品リユース市」受け継がれる「不用品」 1年・立石啓介など20名	1.13(火)	朝日(夕刊)
31	三重県 RDF再開へ向け安全対策の確認などを藤間幸久・元本学教授ら4氏に依頼	1.14(水)	中日(朝刊)
32	本学などの愛知の大学 無料の公開講演会を活発に開催	1.14(水)	日経(夕刊)
33	ロビー：新総長に就任する平野眞一・工学部長 国立大の独立法人化 「総合大学としてのメリットを發揮」	1.15(木)	日経(朝刊)
34	情報科学研究科教授会は研究科長に阿草清滋教授を選出	1.15(木)	中日(朝刊)
35	岐路に立つ 自民党を語る：本山政雄・元教育学部長 野党と競い合い改革を	1.15(木)	中日(朝刊)
36	豊橋技術科学大学、本学と統合へ2006年度メド、文科省に近く方針報告	1.16(金) 1.21(水)	日経(朝刊) 他4社
37	「防災」を考える 思い出すこと 備えること 福和伸夫・環境学研究科教授 犠牲者の8割は建物などの倒壊で	1.16(金)	日刊工業
38	依田直也・立正大教授が本学で講演 日本産産を元気にするには「メード・バイ・ジャパン」に発想の転換を	1.16(金)	中日(朝刊)
39	岐阜大改革 学長権限強化に賛否 佐々木雄太・本学副総長「考え方に共感できる部分はある」	1.17(土)	中日(朝刊)
40	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 アレロパシー(他感作用)	1.17(土)	日経(夕刊)
41	日本化薬は小林猛・工学研究科教授らと共同で新会社設立 がん治療法を2010年をめどに実用化する計画	1.18(日)	日経(朝刊)
42	明日の人に：平野眞一・次期総長 教育も研究も人が軸になってこそ新体制に魂	1.19(月)	読売
43	理化学研究所は企業から研究テーマを募り共同研究に取り組む新制度を4月から始める 理事長・野依良治・本学特任教授が発案	1.19(月)	日経(朝刊)
44	「議員インターンシップ」本学で職場体験をする学生と受け入れ先の議員とが初顔合わせ	1.19(月)	中日(朝刊)
45	日本学術会議学術講演会 後藤俊夫・副総長らが講演	1.20(火)	中日(朝刊)
46	上原記念生命科学財団03年度研究助成金 石原一彰・工学研究科教授ら80人に	1.20(火)	日刊工業
47	名古屋大数理ウェーブ 数学コンクールのフォローアップ企画 大沢健夫・多元数理科学研究科教授が講演	1.20(火)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
48	大学の地域貢献を考えるシンポジウム、金沢で開催 本学などが共催	1.20(火)	中日(朝刊)
49	新年度に発足するエコトピア科学研究機構の初代機構長に松井恒雄・工学研究科教授を選出 遺伝子実験施設の次期施設長に石浦正寛教授を選出	1.21(水)	中日(朝刊)
50	信州大 皮膚がんの遺伝子治療に本学が開発した抗がん作用のある遺伝子製剤を患部に直接注入	1.21(水) 1.22(木)	中日(朝刊) サンケイ
51	名古屋市政本改革へ 「公正職務執行提言委員会」を設置 委員は進藤兵・法学研究科助教授ら6人	1.21(水)	朝日(朝刊)
52	名古屋言語研究会 研究発表「古辞書の紙面構成と注記種」	1.21(水)	朝日(夕刊)
53	法学研究科教授会は研究科長・部長に佐分晴夫教授 国際開発研究科委員会は研究科長に中西久枝教授を選出	1.22(木)	中日(朝刊)
54	財団法人東海学術奨励会は優秀研究15件に助成金 松尾総経理らが審査 愛知県では増田尚史・教育発達科学研究科助手ら	1.22(木)	中日(朝刊)
55	県「食と緑が支える県民の豊かな暮らしづくり条例」の制定に関し 農林水産委員会が開かれた 竹谷裕之・生命農学研究科教授が参考人として出席	1.22(木)	中日(朝刊)
56	中部6国立大メインバンク選定 本学はUFJ銀行	1.22(木)	日経(朝刊)
57	医学の現場から：佐藤祐造・総合保健体育科学センター教授らに漢方治療の現状、役割と意義など東洋医学について聞いた	1.23(金)	中日(朝刊)
58	県が特区申請「あいち・知と技の探求教育特区」本学など愛知4大学が講座を開講する	1.23(金) 1.24(土)	日経(夕刊) 毎日(朝刊)
59	教育発達科学研究科教授会は研究科長・部長に村上隆教授を再任	1.24(土)	中日(朝刊)
60	訃報：鳥山尚志・生物機能開発利用研究センター教授 23日死去	1.24(土)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
61	「国立療養所中部病院」改め「国立長寿医療センター」が誕生 大島伸一・医学部附属病院長が初代総長に内定	1.25(日)	日経(朝刊)
62	浪川幸彦・多元数理科学研究科長の数楽、数が苦：日本語 あいまいではなく厳密	1.26(月)	中日(朝刊)
63	中部国際空港着工後、周辺海底の環境が悪化 西條八東名誉教授らの研究グループが発表	1.26(月)	毎日(朝刊)
64	天文学講演会を金沢で開催 天体物理学研究室、電波望遠鏡「なんてん」がとらえた宇宙の姿など紹介	1.27(火)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
65	わが青春の母校：名古屋大学 進化続け130余年国の未来を担う東海のシンクタンク	1 27(火)	毎日(朝刊)
66	滋賀県立八日市高校、卒業生の大学受験合否結果などを無断提供 中嶋哲彦・本学教育発達科学研究科教授「プライバシーの侵害」	1 27(火)	中日(朝刊)
67	With きゃんぱす：名古屋大クイズ研究会 知力磨き早押し競う	1 27(火)	朝日(夕刊)
68	大学医局をめくり研究会 伴信太郎・医学系研究科教授らが講演	1 28(水)	読売
69	第1回生活文化研究フォーラム 和崎春日・文学研究科教授らが講演	1 28(水)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
70	名岐駅伝チーム紹介：名古屋大学	1 28(水)	中日(朝刊)
71	国際言語文化研究科教授会は研究科長に近藤健二教授を選出	1 29(木)	中日(朝刊)
72	ひととき：大島伸一・医学部附属病院長 国立大病院への公費助成妥当で公平な評価を	1 30(金)	中日(朝刊)
73	国公立大2次中間出願状況 本学の志願者数急増 昨年最終倍率超す学部も	1 31(土)	毎日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

本連載第8回（No.115）において、本学東山キャンパスのシンボルの一つである豊田講堂（設計者：横文彦。1962年度日本建築学会賞受賞）が1960年にトヨタ自動車工業株式会社（当時）から建設寄付を受けた建物であることについて触れました。今回は、その完成式典等について紹介します。

豊田（とよだ）講堂は1960年4月に竣工しましたが、その完成記念式典は、同年5月9日に行われました。本資料室の保管資料によると、式典は「開式の辞」「音楽演奏」「式辞」「設立経緯について」「工事経過報告」「寄付目録贈呈」「感謝状贈呈」「総長あいさつならびに感謝状授与」「文部大臣祝辞ならびに感謝状授与」「来賓祝辞」「祝電披露」「万才三唱」「閉式の辞」の順で行われ、式典後には同講堂ロビーで祝賀会が催されました。

写真（左下）は、完成式典の際に、本学とトヨタ自動車工業株の連名で用意された記念品（木製ブックエンド）です。各サイズが横幅16cm×奥行10cm×高さ15.5cmの豊田講堂をデザインとした特製品ですが、その製作者名や製作数量などは明らかではありません。なお、同講堂の完成記念品としては、このブックエンドのほかに名大生協が作成した「豊田講堂完成・第1回名大祭 記念絵葉書」（4枚組み）があります。



豊田講堂完成式典



音楽演奏



ブックエンド



生協作成の記念絵葉書

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、  
大学史資料室（052-789-2046、nua\_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。